

北井一夫 いつか見た風景



【いつか見た風景】より<五能線> 青森県津軽 1972年

第1回木村伊兵衛写真賞受賞。
平凡な個の日常を見つめ続ける、
リアルで身近なドキュメンタリー。

会 場 東京都写真美術館 3階展示室
開催期間 2012年11月24日(土)～2013年1月27日(日)
主 催 東京都 東京都写真美術館／朝日新聞社
協 力 ギャラリー冬青

展覧会概要

東京都写真美術館では日本を代表する写真家の一人である北井一夫の個展を開催いたします。美術館での個展は今回が初めての機会となります。

本展覧会は、学生時代から現在の最新作のシリーズまで、主要なシリーズをたどる展示です。初期の代表作「バリケード」、「三里塚」などは当時の社会を象徴する代表的な事象を扱うポルタージェ性の強い作品ですが、バリケードの中に立てこもる学生や成田闘争に参加した農民を、内側から捉えた姿は、同じできごとを撮影した多くの写真とは一線を画した作品でした。その後始まった「いつか見た風景」、「村へ」は失われていく日本の農村の原風景を捉えた作品で北井の代表作となり、彼の評価を確実なものとししました。その後東京のベットタウンの一つの船橋市の市民の生活を撮った「フナバシストーリー」などは、新興住宅街の生活を明るく、軽いイメージで捉えたものです。北井の作品はさまざまに作風が変化しているようにも見えますが、常に時代と向き合う視点であることには変わりはありません。人々の生活を捉えた風景はどんな世代の人にも、いつかどこかで見たことのある風景のように感じられるでしょう。

本展の見どころ

東京都写真美術館重点収集作家の北井一夫、初の美術館個展

本展は、第1回木村伊兵衛写真賞受賞作家であり、当館の重点収集作家*でもある北井一夫の、美術館における初めての個展です。学生時代から現在まで、代表作から最新作まで、北井の活動を一堂にご紹介する回顧・集成展です。 *東京都写真美術館が日本の代表的作家として、重点的に作品を収集する作家

平凡な個の日常を、内側からみつめ続けるドキュメンタリー

北井一夫の写真は、私たちにどこか懐かしく、それでいて新鮮な印象を与えます。それは北井が、どのようなテーマであっても、そこに存在する「日常」に目を向けて、その内側からの目線で撮り続けてきたからなのかもしれません。北井は、VIVO（1960年前後に活動した写真家のセルフエージェンシー）やPROVOKE（1960年代の写真の同人雑誌）をはじめとする写真家グループや団体には一切所属せず、他の写真家との師弟関係もありません。しかし1970年代には『アサヒグラフ』や『アサヒカメラ』などで毎月のように連載し、無名だったわけでもありません。自分の表現を模索しながら、独自のキャリアを積み重ねてきました。北井の写真家としての生き方やその作風は、社会の変化に翻弄されながらも、平凡な個としての存在意義や幸せを探し続ける現代の私たちにとって、共感できるところがたくさんあります。私たちは、北井の作品から最もリアルで身近なドキュメンタリーを感じることができるでしょう。

最新作「道」を初展示

本展では、北井の最新作「道」を初展示します。北井にとって東北は「いつか見た風景」や「村へ」のシリーズで何度も撮影に訪れた場所です。しかしこの作品には、いままでのようにそこに暮らす人びとの姿はありません。ただひたすらに道だけの風景を撮る北井。その非凡なる平凡な目線で、いまの東北の「日常」を見つめ続けています。

主な出品作品

「抵抗」、「過激派」、「バリケード」、「三里塚」、「いつか見た風景」、「村へ」、「新世界物語」、「フナバシストーリー」、「おてんき」、「1990年代北京」、「ライカで散歩」などのシリーズから全206点の出品を予定しています。

下記に北井氏による作品解説をご紹介します

抵抗(1964-1965)

1964年、ちょうど20歳の時、社会と写真の秩序への反抗を写真に定着させようとこころみて、写真集『抵抗』を出版したことが私の写真の始まりだった。教科書に掲載された名作写真たちとはすべて逆のダメ写真を作って写真集を出版しようとした。被写体はピンボケと手ブレ、フィルムは粗粒子のザラザラで擦り傷だらけ、1年以上も高温多湿の場所に放置したので、乳剤面は貼り付いて跡が残ったままにした。そしてそれらをマチュールとして見立てて全学連のデモを撮影した。

過激派・バリケード(1965-1968)

新左翼学生運動をする全学連学生のことを、めちゃくちゃな暴力集団という意味を込めて、マスコミは過激派と呼んでいた。私はそう呼ばれることを気に入っていた。日本各地の大学で大学民主化を要求する一般学生を巻き込んだ組織全共闘（全学共闘会議）による大学バリケード封鎖のストライキ闘争が起こった。日本大学芸術学部校舎もバリケードで封鎖された、私はストライキ学生たちと4ヶ月間ともに寝泊りして写真を撮った。ストライキが長引くにしたがって、バリケード封鎖の校舎内は、ストライキ

学生たちの衣食住の場所になり、非日常空間から日常生活の場へと変化した。日常生活と化したものたちを写真に撮った。

[過激派]より<機動隊突入> 長崎県佐世保市 1968年



三里塚(1969-1972)

写真は都市論だということがよく語られた。同世代の若い写真家たちは新宿や渋谷を撮った。しかし、若者の熱気にむせ返る都会が好きではなかったので都会から離れて、経済成長とともに過疎化し、崩壊にむかう日本の農村の中で、人びとの生活や風景、家族や農作業する人たちを撮ろうと考えるようになった。欧米ではちょうど、都市社会生活をドロップアウトしたヒッピーたちが田舎を目指した時代でもあった。これからは、広角レンズで人や風景に近付いてリアリティーのある写真を撮ろうと考えて、キヤノン II D に 25mm レンズを買って成田空港反対闘争の農村三里塚へ行った。写真集にある場所は、今ではすべて成田国際空港滑走路の下になってしまった。



[三里塚]より<少年行動隊> 千葉県成田市 1970年

いつか見た風景(1970-1973)

見知らぬ村や町をたずねて、そこに暮らしている人たちやその場の風景を見ているだけで楽しかった。働きざかりの人たちが都会の企業に職を求めて村を捨てたり、農閑期の出稼ぎに出たりして、どこの村もひと気がなく、年寄りと子どもばかりが目立って見えたのだった。その風景は、父と別居して母の姿を見ることも少なかった私の子どもの頃とどこか似かよって見えた。それは、旅先の風景の中に幼児体験の記憶に残る映像を探して、失われた幼児体験の過去をよびもどし作り直すことだった。

[いつか見た風景]より<五能線> 青森県津軽 1972年



村へ(1973-1981)

子ども時代から何回も引っ越しを繰り返したので、故郷といえるような濃密な場所がない。それでも子ども時代を過ごした故郷は恋しいもので、暗室の赤色電球の下で現像液の中に浮かびあがる写真に、自分の故郷を何度も投影してみた。しかし、この写真を撮影している間も、農村の人びとは労働力として

大都市に吸収されつづけ、過疎化が進行していた。1970年代は、農業中心の村社会と人間関係が崩壊し、古き良き時代の日本が終わった時代でもあった。

[村へ]より<雪の中で> 秋田県湯沢市 1974年



フナバシストーリー(1983-1987)

畑や田んぼにブルドーザーが入って造成地になり、そこに白くてきれいな住宅が建ち並び、やがて新しい家族が入ってくる。電車の窓から見る東京郊外の風景は、どこもこれと同じように見える。『村へ』で見ていた村が長男の社会だとすると、私が住んでいる船橋のように近郊都市の新しい住宅の生活に入る人たちは、村を出て大都市の会社に勤める二男三男が一家の柱になった家族であるように見える。自身の家族も同じなのだが、自分たちが育った村の記憶を故郷と思い、その子どもたちの目には今見ている造成地や団地の新しい風景が故郷として映っているのだった。



[フナバシストーリー]より 千葉県船橋市 1987年

おてんき(1991-1995)

特殊レンズを使わないという私の写真作法の掟を破って、一眼レフ用のアダプターを付けると400ミリになる200ミリレンズと接写のためのマクロレンズを買った。どこへ行くにもその2本のレンズはかならずリュックに入れて持ち歩き、遠くにいる鳥が近くに写ったり、小さな虫が大きく写ったりするのを面白がっていた。その後すぐにあきて、やはり遠くにいる鳥は遠くにいるように、近くに写したければ鳥が近くに来るのを待てばいい、小さい虫を無理して大きくするより、小さくてもその周囲の木や草をよりくわしく写したほうがいいと、思うようになった。



左) [おてんき]より<つばめの子> 岐阜県荘川村 1991年 右) [道]より 福島県南相馬市 2012年

道(2011-)

田舎の写真の撮り始めてから東北は、何度も繰り返し旅行してきた。大震災の3ヵ月前も、青森から八戸線と三陸鉄道乗り継いで、海岸線の風景を見ていた。その時見た村の建造物は、みな大津波にのみこまれて跡形なく消えた。ただ道だけが、以前ここが村であったことの匂いとどめて残していた。

北井一夫略歴

1944年、中国・鞍山（あんざん）生まれ。日本大学芸術学部写真学科中退。65年に横須賀の原子力潜水艦寄港反対闘争をテーマにした写真集『抵抗』を自費出版。69年より、新東京国際空港反対闘争の記録である「三里塚」を『アサヒグラフ』に連載。闘争に身を置く農民たちの日々の生活を綴った映像は、新しいドキュメンタリーとして高い評価を得た。74年から『アサヒカメラ』に「村へ」のシリーズを長期連載。76年に第1回木村伊兵衛写真賞を受賞。その後も、81年に、大阪の庶民生活取材した『新世界物語』、89年に船橋市に生活する人々を文章と写真で綴った『フナバシストーリー』を刊行。現在も『日本カメラ』にて「ライカで散歩」を連載中である。

関連イベント

○作家とゲストによる対談

①北井一夫×金子隆一（東京都写真美術館専門調査員）

2012年12月15日（土）14:00-15:30

②北井一夫×田中長徳（写真家）

2013年1月12日（土）14:00-15:30

会場：1階アトリエ（定員70名）

※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。※当日10時より1階受付で整理券を配布します。番号順
入場 自由席



[1990年代北京]より<鳥市> 北京 1996年

○出品作家による新春特別フロアレクチャー

2013年1月3日（木） 11:30～

展示解説： 北井一夫（出品作家）

藤村里美（東京都写真美術館学芸員）

○担当学芸員によるフロアレクチャー

本展会期中の毎月第2・4金曜日 16:00-

本展覧会の半券（当日有効）をお持ちの上、会場入り口にお集まりください

展覧会カタログのご案内

本展の開催に合わせて、全出品作品の図版と、増田玲（東京国立近代美術館主任研究員）、藤村里美（東京都写真美術館学芸員）によるテキスト、北井一夫氏による作品解説（このプレスリリースでも一部紹介）、個人史を含んだ年表が掲載された展覧会カタログを刊行します。

「北井一夫 いつか見た風景」 発行：冬青社 予価 2,730円（税込）

東京都写真美術館1階ミュージアムショップ ナディッフ バイテンにて販売します。

開催概要

展覧会名 北井一夫 いつか見た風景 Kitai Kazuo Somehow Familiar Places

会 期 2012年11月24日(土)～2013年1月27日(日)

会 場 **東京都写真美術館** 3階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099

開館時間 10:00～18:00(木・金は20:00まで)、ただし1月2日(水)・3日(木)は11:00～18:00

※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日(ただし12月24日、1月14日は開館し、翌日休館)、および

2012年12月29日～2013年1月1日

観覧料 一般 600(480)円/学生 500(400)円/中高生・65歳以上 400(320)

※()は20名以上団体料金。※東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および
障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩約7分/東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分

※当館には専用の駐車場がありません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

お問い合わせ

東京都写真美術館 事業企画課

電話 : 03(3280)0034 FAX : 03(3280)0033

展覧会担当 藤村 里美 s.fujimura@syabi.com 金子隆一 r.kaneko@syabi.com

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com

前原 貴子 t.maehara@syabi.com